

## メトロポリタン史学会 第八回総会・大会のお知らせ

第8回総会・大会を以下の通り開催いたしますので、お知らせいたします。今回のシンポジウムのテーマはジェンダーです。日本史と西洋史からの報告、そして東洋史からのコメントをお願いしました。歴史をジェンダーの視点で読み解くことの意味を考えたいと思います。皆さんの参加をお待ちしております。

- 日時 2012年4月21日(土) 午前10時30分～午後6時  
会場 首都大学東京 本部棟1階・大会議室  
(京王相模原線南大沢駅下車 徒歩約10分)
- 日程 ①総会：午前10時30分～12時  
②大会：午後1時～6時

### シンポジウム「歴史におけるジェンダー——権力と女性——」

〔報告者〕

高松百香氏 (東京学芸大学非常勤講師)

「平安後期の政治文化とジェンダー——女院を中心に——」

福田千鶴氏 (九州産業大学)

「近世奥向研究の現状と課題」

長野ひろ子氏 (中央大学)

「維新変革とジェンダー」

姫岡とし子氏 (東京大学)

「歴史研究とジェンダー

——近代ドイツのナショナリズムを例にして——」

全体討論：午後4時30分～6時

コメント：坂元ひろ子氏 (一橋大学)

③懇親会：午後6時30分～8時30分 (会費5,000円)

### メトロポリタン史学会第7回総会・大会報告

2011年11月26日(土)、首都大学東京 本部棟・大会議室において第7回総会・大会が開催されました。これまで総会・大会は4月に開催してきました。第7回総会・大会も今年の4月23日(土)に開催を予定し

ていましたが、東日本大震災と福島第一原発事故のため、中止を余儀なくされました。そして半年後に改めて開催することとし、今回の開催に至ったものです。

まず午前 10 時 30 分から 12 時まで総会が行われました。2010 年度の活動報告、会計決算、監査結果が報告され、了承されました。次に 2011 年度の活動方針案と会計予算が審議されました。総会が半年延期されたため、その間の活動は委員会で承認された暫定方針・予算に基づいて行われてきました。議論ではその半年間の活動経過も含めて検討され、全会一致で新しい方針と予算が承認されました。最後に 2011～13 年度の新委員を選出して総会を終えました。

午後は大会シンポジウム「帝国とその遺産」を行いました。シンポジウムは帝国と植民地間の関係を歴史的に問い直すことを目指したものであり、前田委員の趣旨説明の後、次の三氏の報告が行われました。

塩谷哲史氏（筑波大学准研究員）

「アムダリヤの水を誰が管理するのか

— 帝政末期ロシア＝ヒヴァ・ハン国間の灌漑利権論争 —」

麻田雅文氏（日本学術振興会特別研究員 PD・首都大学東京）

「帝国から国民の河へ — 松花江をめぐる日中露の闘争, 1895～1950 —」

岡田友和氏（日本学術振興会特別研究員 PD・大阪大学）

「仏領インドシナにおける都市と労働 — ハノイを事例に —」

いずれも新進気鋭の研究者による実証的かつ問題提起的な報告であり、全体討論では松重充浩氏（日本大学）と難波ちづる氏（慶應義塾大学）のコメントを交えて、活発な議論が行われました。報告は 12 月刊行予定の『メトロポリタン史学』第 8 号に特集論文として掲載される予定です。ご期待ください。

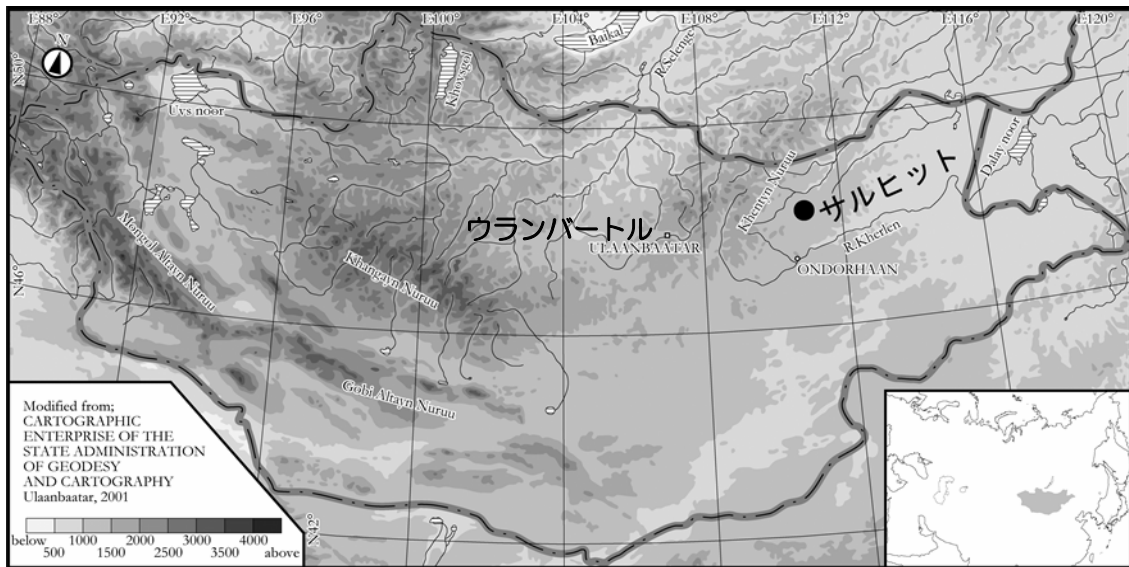
## 【歴史随想】

### モンゴル・サルヒット野外調査記（その 4）

出穂雅実（首都大学東京、ユーラシア上部旧石器時代）

2009 年 3 月 27 日にフランスから私の手元に一通のメールが届き、サルヒット人類化石発見地点の研究は、突然また動き始めた。この時点で、私が 2007 年 8 月に発見地点の現地予備調査を実施してから、すでに 1 年半ほどの月日が流れていた。メールの差出人は、フランス・ポールサバティエ大学のジョゼ・ブラーガ教授であった。私はブラーガ教授と面識はなかったが、彼はアフリカをフィールドにしている気鋭の形質人類学者であり、ホモ・ハビリス（約 230～140 万年前まで存在していたヒト属の一種）の人骨の三次元形態解析を専門としている。メール本文には「パリ第 1 大学のイヴ・コパンス名誉教授とモンゴル科学アカデミー考古学研究所（以下、IAMAS）による協議の結果、サルヒット人類化石発見地点の試掘調査を 5 月末から実施することになった。そして試掘調査の成果次第では 8 月以降に発掘調査をおこなうことで合意に至った。この調査にはフランスから人類学者 2 名、古脊椎動物学者 1 名、そして堆積学者 1 名が参加する。コパンス教授は、あなたが第四紀地形発達史の担当として参加することを期待しています。（以下、事務的な事柄のため省略）」と“フランスなまり”の英語で書かれていた。私は喜んで参加する旨の返事をすぐに書いた。

サルヒット調査は、2007 年 8 月の国際会議から 1 年半もの間、全く動きがなかったように見えたが、実は



**第1図** モンゴル・サルヒット人類化石発見地点の位置。ロシア・ザバイカル地方の国境までわずかに百数十キロメートルの地点にある。周辺の景観は広大なステップである。

そうではなかった。後日談では、コパンス教授は国際会議から帰国してすぐに、試掘調査の資金を獲得するために準備をはじめたそうである。しかし、そもそもコパンス教授が様々な実行中のプロジェクトで多忙を極めていたこともあり、なかなかうまくいかなかった。最近になってようやくいくつかの研究助成金が採択され、調査を遂行する目処が立ったとのことであった。なるほど、フランスから遠く離れたモンゴルで、しかも化石が産出するかどうかわからないような地点をなぜ大金を投じて調査しなければならないのかを説明することは、学術・文化に対して日本とは比較にならないほど理解があるフランスであっても、そしてコパンス教授ほどの大家であっても、非常に困難で、大変な苦勞があったのだろうと想像した。サルヒット調査のような、具体的な成果が出るかどうかわからない挑戦的なフィールド・ワークや研究プロジェクトは、つねに資金獲得の問題がついてまわることを、フィールド・ワーカーなら誰もが知っている。調査を実現するための資金の工面に奔走してくださったコパンス教授には、心から感謝しなければならない。

調査への参加を決めたら直ちに、調査対象地域の地形図と空中写真の手配、そして斜面地形の地形発達史の復元をするための最新の研究論文の入手など、日本でできる調査準備を慌ただしくおこない、2009年5月23日12時過ぎに成田空港を発った。

しばらくすると飛行機はソウル上空そして北京上空を通過した。北京上空では窓下に一面の畑が広がっていたが、内蒙古あたりから畑が疎らになり、モンゴルの領内に入ると畑は全く無くなった。そして、畑の代わりに草原とゴビ(砂漠)が広がりはじめた。毎度のことであるが、窓下の雄大な草原の景色を見ると、自分はまたモンゴルに来たのだと実感させられる。同日18時頃、成田からおよそ5時間半の空の旅でウランバートル・チンギスハーン国際空港に到着した。



**写真1** チンギスハーン国際空港に着陸直前の様子。ウランバートル市街を望む。強風による機体の乱高下で強い恐怖を感じた。

着陸直前には機体が強風で大きく乱高下したため強い恐怖を感じたが、春のモンゴルでは当たり前のことであるらしい。滑走路延長上に山岳地帯があり、常に滑走路の北方向からの離着陸となっている。この空港は天候不順による影響を受けやすく、春期はおよそ 25% のフライトがキャンセルまたは遅延になるらしい。

税関を通過し到着ロビーに出たところで、本プロジェクトの野外調査リーダーであるブラーガ教授とモンゴル側カウンターパートのビャンバー・グンチンシュレン IAMAS 副所長が迎えに来てくれていた。ブラーガ教授が空港に出迎えに来ている事に私は非常に驚いた。実は、ブラーガ教授率いるフランス隊は、私よりも 3 日前にソウル経由でウランバートルに到着し、22 日には私の到着を待たずに先にサルヒットに向けて出発する予定だった。しかし、彼の話によると、強風のために空港が 2 日間に渡って閉鎖されたため、昨日ようやくウランバートルに到着したという。この日程変更に伴って、彼らがウランバートルからサルヒットへ出発する日を私の到着の翌日、24 日の早朝に変更し、全員一緒に現地に向かうことにしたのだ。

強風による予期せぬ日程変更に翻弄され、私は以前に読んだ司馬遼太郎の著書『モンゴル紀行：街道をゆく (5)』を思い出した。この著書の中で、司馬は 1973 年のモンゴル初訪問の際、強風のため空港で数日間の足止めを余儀なくされたと書いていた。

空港からウランバートル市街まではグンチンシュレン副所長の自家用車で移動した。途次、郊外には木造のバラック住居に混じり、ゲル住居が散在している。ここでもう一度モンゴルを実感する。中心地に近づくとレンガ造りの建物が増え始める。ほとんどの看板はキリル文字であり、雰囲気はロシアととてもよく似ている。

小一時間ほどで市街中心部のホテルに到着し、グンチンシュレン副所長と別れた。滞在するホテルは、一泊 2,000 円程度の小さな安宿だった。我々の調査隊はホテル 3 階のフロアを借り切っていた。階段を上がると（エレベーターはない）、古生物学者のフランソワ・デュラントン博士（トゥールーズ博物館）、人類学者のファブリス・デメテール博士（フランス国立科学研究センター）、堆積学者のフラビア・ジラルド博士（ポールサバティエ大学）が慌ただしく機材の準備をしていた。それぞれの研究のバック・グラウンドを交えながら挨拶をしたあと、一緒に夕食に向かった。夕食に向かう途次、フランス国立自然史博物館砂漠研究部門のピエールアンリ・ジスカルド名誉教授が合流した。ジスカルド教授は、モンゴル南部のゴビ地域で歴史時代の考古学調査をおこなっている研究者であるが、今回の調査にコパンス教授が参加できなくなったため、ジスカルド教授がウランバートルでサルヒット現地調査の後方支援担当となった。日本の調査にはない体制の充実ぶりに心強かった。

ホテルから徒歩 5 分ほどのところにある、ウランバートルで人気のイタリア料理店 Pizza Broadway に入った。韓国人が経営しているため、メニューの後半にはプルコギやストゥブチゲセットなどの韓国料理がずらりと載っていた。全員ピッツァとサラダを一つずつ注文し、モンゴルのチンギス・ビールで調査の成功を祈って乾杯した。ブラーガ教授とデュラントン博士はいかにも南フランスの人らしくとても陽気で、調査隊の雰囲気は非常に良かった。ちなみにフランス隊は昨晚もこの店で夕食をとっており、すでにフランス隊のお気に入りの店になっていた。調査後もウランバートル滞在中はほぼ毎晩通うことになった。日本人であ

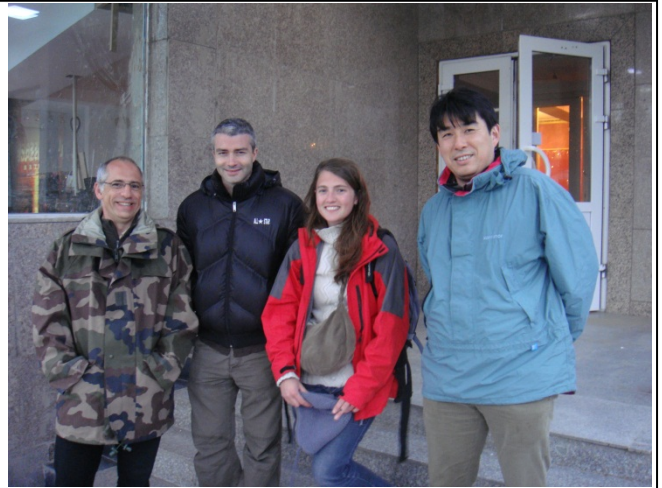


写真 2 出発前日の記念写真。左からデュラントン博士、デメテール博士、ジラルド博士、そして私。ホテルの玄関前にてブラーガ教授が撮影。

る私は、せっかくモンゴルに来たのだからモンゴル料理を毎日でも楽しみたいのだが、彼らは、もちろんモンゴル料理を数回は楽しんだが、基本は西洋料理を選択した。フランス人は自分たちの食文化を曲げないというステレオタイプがあながち嘘でないと感じることが、これ以外にも何度もあった。

あらためて今回の調査体制は次の通りである。フランスからは、ジョゼ・ブラーガ教授（ポールサバティエ大学）、フランソワ・デュラントン博士（トゥールーズ博物館）、ファブリス・デメテル博士（フランス国立科学研究センター）、フラビア・ジラルド博士（ポールサバティエ大学）がフィールドに赴く。国立自然史博物館砂漠研究部門のピエール・ヘンリ・ジスカルド名誉教授が調査のバックアップのために、ウランバートルに残って後方支援の任務に当たる。

モンゴル側カウンターパートは、IAMAS のツェヴェンドルジ所長の指揮の下、グンチンシュレン副所長、ルフンデフ研究員がサルヒット入りする。この他にウランバートル教育大学の学生アルバイト 5 名、日常生活のサポートのためにモンゴル人運転手 1 名と料理人 1 名が同行する。ツェヴェンドルジ所長は抜けられない公務のために、ジスカルド教授と共にウランバートルに留まることとなった。フィールドに赴くのは、合計 14 名である。

今回の試掘調査は通常の発掘調査より期間が短いといっても、2 週間に及ぶ。調査地の近辺には、緊急時救急対応ができる施設や、日常の物資を補給できるような集落はない。食料を含む日常物資は、ウランバートル滞在中にザハと呼ばれる屋外市場で大量に買い込み、トラックに積んだ。羊肉は牧民から現地調達の手配である。緊急時のために、南極でも地球上どこでもつながるといいうイリジウム携帯電話をフランスから持参していた。

モンゴルでは毎年、ペストの発症例が報告され、広い地域が封鎖される。ペストはタルバガンと呼ばれるモルモットがキャリアーであり、タルバガンの食肉やタルバガンについているノミがヒトを刺咬することでペスト菌に感染し発症するという。有効なペストのワクチンはないが、私は日本を出国する前に肝炎・狂犬病・破傷風のワクチン接種を受け、可能な限りの備えをした。



写真 3 (上段) ホテルを出発、4 (中段) モンゴル科学アカデミー考古学研究所の入る建物、5 (下段) フィールドへ出発する直前の積み込み作業。眠い目をこすりながら夜明けと共にホテルを出発。考古学研究所の前で急いで積み込みを行う。

翌5月23日、まだ夜も明けきらないうちに起床した。硬い黒パンを嚙り、ぬるい紅茶で流し込み、6時頃にホテルを出発した。ホテルから15分ほどで考古学研究所に到着、モンゴル人スタッフと合流した。屈強なウランバートル教育大学の学生たちが手際よく調査機材の積み込みを終えると、7時頃にいよいよサルヒットに向けて出発した。30分ほどで市街地を抜けると、すぐに草原が拡がり始める。これから丸一日かけて現地へ向かう。これから始まる調査への期待と、最善の準備はできなかつたけれども、もう引き返すことはできないし、なるようにしかないと開き直って観念したような気持ちが複雑に入り混じった奇妙な感覚が去来した。(つづく)



写真6(上) ルートA0501(ウランバートル→ウンドゥルハーン)の風景。ウランバートル市街を抜けるとすぐに草原の世界が拡がる。

## 第5回歴史探訪「江戸城の遺跡を訪ねて」のお知らせ

歴史探訪はしばらくお休みをいただいておりますが、第5回を以下の通り行います。詳細は別途お知らせいたしますが、皆さんの参加をお待ちしております。

日 時：5月20日(日) 午後1時～5時

集合場所：千代田区立日比谷図書文化館(旧日比谷図書館)

講 師：後藤宏樹氏(千代田区区民生活部図書・文化資源担当課文化財主査)

内 容：昨年リニューアル・オープンした千代田区立日比谷図書文化館の常設展示を見学の後、江戸城の遺跡を巡回します。

### 【投稿のお願い】

本会では、会員の皆様の積極的なご寄稿をお待ちしています。広く、歴史研究・教育の諸領域にかかわる内容のものを求めます。

### 『メトロポリタン史学』(The Metropolitan Shigaku) 投稿規定

(1) 本誌は、年一回12月に発行するものとし、原稿の締切は、毎年8月末日とする。

- (2) 投稿資格は、原則として会員に限る。ただし、編集委員会からの依頼原稿に関してはこの限りではない。
- (3) 投稿言語は、日本語または英語とする。
- (4) 投稿原稿は、歴史学・考古学、歴史教育の分野に関する以下の種目のものとする。
- ①論文（図表を含み、24,000字以内；英文の場合は、8,000語以内）
  - ②研究ノート・史料紹介（同 12,000字以内；英文の場合は4,000語以内）
  - ③学界動向（8,000字以内；英文の場合は2,700語以内）
  - ④時評・提言（4,000字以内）
- (5) 論文、研究ノート（縦書き、横書きいずれも可）には、欧文で要旨（300語以内）を添付する（原文が英文の場合は日本語要旨800字以内）。また目次用の英文タイトルを付記する。
- (6) 原稿は、編集委員会が採否を決定する。その際、論文、研究ノートについては、編集委員会および編集委員会が委嘱した査読者の審査を経る。
- (7) 著者校正は、初校のみとし、校正時における文章の大幅な変更は認めない。
- (8) 注は、末尾にまとめる。
- (9) 原稿は原則として、印字された原稿（表、図表を含む）3部、フロッピーディスク及び別記送り状\*（1部）を提出する。
- (10) 掲載の論文、研究ノート・史料紹介、学界動向については、別刷り50部を進呈する。
- (11) 原稿の送り先、照会については、

〒192-0397 八王子市南大沢1-1 首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系  
 国際文化コース（歴史・考古学分野）、河原 研究室気付  
 『メトロポリタン史学』編集委員会  
 Tel: 0426-77-2119（河原研究室） Fax: 0426-77-2112  
 E-mail: kawahara@tmu.ac.jp（河原温研究室内）  
 SNC47077@nifty.com（河原温）

\* 送り状は学会ホームページ（<http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/>）からダウンロードしたものをコピーするか、事務局にお問い合わせください。

### 【事務局からのお願い】

●今年桜ならぬ梅の花が見頃を迎えている今日この頃、第8回大会・総会のご案内を差し上げます。奮ってのご参加をお願いする次第です。また併せて引き続き会財政健全化のため、年会費を年度内にお支払い下さいますようお願いいたします。納入に際しては下記の郵便振替をご利用下さい。郵貯口座をお持ちの方は、ATMで直接記号番号を入力して手続きすれば、手数料がかかりません。一般5,000円、学生・院生3,000円です。

メトロポリタン史学会（会長 佐々木隆爾）

〒192-0397

東京都八王子市南大沢1-1

首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系 国際文化コース 歴史・考古学分野内

TEL: 0426-77-2110（木村誠研究室） E-mail: mshigaku@tmu.ac.jp

ホームページ: <http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/>

郵便振替: 00100-0-537287 メトロポリタン史学会